

第 3 回 SPARC Japan セミナー2018

「オープンアクセスへのロードマップ: The Road to OA2020」

開会挨拶/概要説明

石山 夕記

(一橋大学附属図書館)



石山 夕記

一橋大学学術・図書部学術情報課雑誌情報係員。2017年4月より現職。慶應義塾大学文学部図書館情報学情報資源管理分野修士課程修了。現在JUSTICEにて交渉作業部会及びOA2020対応検討チームに所属。

本日は第3回 SPARC Japan セミナー2018「オープンアクセスへのロードマップ: The Road to OA2020」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

OA2020 とオープンアクセス

世界中の誰もが何の障壁もなしに、いつでも無料で学術論文にアクセスすることができるという、このオープンアクセスの概念は、2002年に Budapest Open Access Initiative (BOAI) で提唱されて以降、理念としてはだいぶ浸透してきたと言えます。しかし、現実を目を向けてみると、日本におけるオープンアクセスの状況は進んでいるとは言えません。

2015年に始まった Open Access 2020 Initiative (OA2020) という取り組みは、世界中で公表される全ての論文を即座にオープンアクセス化することを目指したものです。これが従来の取り組みと異なっている点は、オープンアクセスが当たり前である世界の実現に向けて具体的な行動を起こしていくこと、そしてそれを世界的な動きにつなげることを重視しているところです。

これまでに世界中の機関がこの OA2020 の関心表明に署名してきました。日本においても、2016年に大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE) が署名をいたしました。ヨーロッパでは既存の購読モデルの撤廃と、オープンアクセスを可能にする新しいモデルも出てはじめています。今こそ、日本における新たなオープンアクセスモデルの構築に向けた検討を始め、行動を起こしていく時期に来ていると言えるのではないのでしょうか。この OA2020 での取り組みを参考にしながら、そのきっかけをつくることができればという思いから本セミナーを企画いたしました。

講師の紹介

本日は、3人の方を講師にお招きしています。OA2020 プロジェクトリーダーの Ralf Schimmer 先生、JUSTICE 運営委員会委員長の市古みどり先生、そして東北大学副学長や附属図書館長を務めていらっしゃる大隅典子先生です。世界におけるオープンアクセスの動向、日本でのオープンアクセスへの取り組み、執行部としてだけではなく研究者の立場から見たオーブ

ンアクセスと、これだけ幅広い視点からオープンアクセスについての見地を一度に伺うことができるのは、とても貴重な機会かと思います。質疑応答やパネルディスカッションもご用意しておりますので、ぜひ積極的にご参加ください。